

田口佐紀子氏「第二回潮アジア太平洋ノンフィクション賞」受賞
を祝福する

長谷川 将
アジア近代化研究所理事

このたび、わが研究所会員の田口佐紀子氏が「隣居（リンジュイ）お嬢さん」が第二回潮アジア太平洋のノンフィクション賞を受賞されました。まずは心より祝いを申し上げたいと思います。筆者は田口氏の受賞を新聞紙上で知り、その努力が報われ、快挙を成し遂げたことに心からお喜びを申し上げたいと思います。受賞作品は共産党政権発足の1949年に始まり、文革から天安門事件を経て現在に至る間の、一般中国市民の生活の変遷を、著者が北京の外交出版社に勤務していた当時の中国人同僚に取材した話を中心に、綴られています。

当節、何かと話題の多い中国に関する著書は少なくないのですが、その大半は学者や評論家の先生方が書く見聞や専門的な解説書が多い中で、本書は一味違う内容とスタイルで、読者を魅了することは疑いなしでしょう。その意味でも、本書は楽しく、読める、素晴らしい読み物と言えるでしょう。

著者の田口氏は2012年に楊継繩著『毛沢東 大躍進秘録』（文芸春秋社）という共産中国の最大の悲劇を扱った歴史書の翻訳や編集に携わられた経験を持つことはよく知られています。田口佐紀子氏は1984年から85年にかけて、北京の外交出版社に勤務し、

そこで延安時代からの共産党幹部の娘、宋瑾と知り合います。田口氏は、同じアジアの隣国に同時代に生を受けました。共産党幹部の娘の人生に関心を持ち、彼女とその家族を克明に取材し、この作品を書きました。

本書の詳細は是非一読して読者自身で楽しんでいただきたいのですが、ここではその言っただけを披露させて頂くことにしましょう。延安時代の両親の生活、共産党幹部の子弟用保育園の様子、国民党の攻撃による延安からの脱出、北京での建国の模様、などが当事者からの聞き取りで、詳細に、そして生々しく描かれています。

友人である宋瑾や党幹部の子女を教育したエリート小・中・高校で知る一般労働者との格差の話、ソ連との不仲の様子も描かれており、毛沢東の「大躍進政策」がもたらした飢えと犠牲、文化大革命による一家離散と農村への下方生活の厳しさなどの様子も、生々しく描かれています。また、文革の終焉と同時に始まった市場経済への転換と社会変動などにも触れられており、その中で翻弄される市民の生活が一般市民の目線で、彼らの生活がつづられています。

そこには統計数字も公式記録もないのに、中国市民の生の声が聞こえて来ようようです。

宋瑾とその家族の人生記録の取材と一部文献とを参考にし、対比しながら、本書は書かれています。この作品はそのまま1949年から始まった中華人民共和国60余年の歴史を知ることにも役立つもので、市民の目線で見えた現代中国史とっていいでしょう。

宋瑾と作者の田口氏は生まれた環境も違い、受けた教育も異なり、価値観も大いに異なるのですが、友人として、お互いに相手国を理解しようと努めながら、今日に及ぶ長い交友関係を保っているのも興味深いものがあります。その二人が中国共産党の根拠地であった延安に旅をします。延安の過去と現在を対比する中で、宋瑾にとって、両親が共産党幹部として働き、結婚生活を送ったと地を訪ねるといふくだりは大変面白い。いずれにせよ、本書を読めばお分かりのように、読者も歴史の流れに引きづり込まれるような錯覚を持つことは間違いないと感じます。

巻末で、作者は中国の市民生活の変遷とここ数年の目覚ましい変わりように、作者流の分析と解釈に基づいて、こうコメントしています。「戦後の日本と文化大革命後の中国とはとても似通っている」と。また、「両国もオリンピックを開催して大きく変わったが、その後の道は大きく違う」と、指摘しています。2012年に胡錦濤政権を引

き継いだ習近平政権が「中国の夢」として、「中華民族の偉大な復興」策を推進する姿に、作者が最後に言います。「中国と日本は”隣居”リンジュイ（お嬢さん）である」という関係から抜け出すことは永遠にない。そうだとすれば、日本はこの巨大でトラウマを抱えた難しい「お隣さん」とどう向き合い、付き合っていくといいのでしょうか。日本には知恵と戦略が要求されるだろう、と結んでいます。われわれすべてが真剣に考えてみるべきではないでしょうか。

田口氏の受賞作品は、9月5日発売の雑誌『潮』10月号に選考事由とほんの抜粋が紹介されました。単行本は今年11月に潮出版社から発売されることになっています。

最後に、作者の略歴を示しておきましょう。彼女は、1943年横浜に生まれ、1965年早稲田大学英文科を卒業されました。その後、1970年代初め、マラヤ大学社会人学級中国語を学び、1984年から2年間、北京外交出版社の日本語組の専門家として勤務した後、中国語と英語のノンフィクションの日本語訳に従事しました。主な訳書には『大逆転』（亜紀書房）を初め、『アジアの雷鳴』（集英社）、『毛沢東 大躍進秘録』（文芸春秋社）などがあります。

わが研究所の同僚のご活躍を心より祝福するとともに、今後のますますのご活躍を祈念するものであります。